

## 中本達也とアトリエに残された作品①

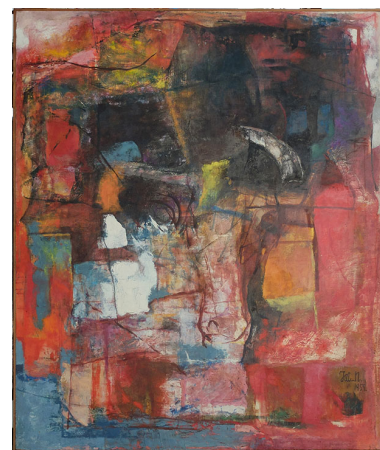
## 1) 全体像～戦後から1973年まで

山口放送制作『美のこころ』（25分、1987年放映）：海上雅臣インタビュー含む

\*大沼信彦氏（山口県周防大島町在住）提供

## 2) 断片による人間性回復

北支那（中国華北地方）で転戦の際、私は、石屋荘近在の砲弾でほとんど崩れてしまった古い廟で休息していた。赤く焼けただれた鉄砲団の跡が、無数に残っている分厚いその壁に、なまなましい色彩の仏たちの断片像を見つけ出したとき、私の存在があまりにも希薄で悲哀に満ちたものを感じられ、「この断片の壁画の人物像こそ本当に生きているのだ」、断片だからこそなお一層私の心に食い入って、私自身を批判し、生きる本来の姿を取り戻す一瞬を感じさせてくれたものであった。確かに北支那の空は広く、青く晴れ渡り、脈打つ地平にうじ虫のような兵士たちのやりきれない、なんともはかないうごめきだけがあった。あの壁画の断片像は健康に息づき、狂い疲れ果てた兵士たちとはまったく対照的ともとれたのだった。（『呪われた美』1970年、6頁）



「建設」（1951年）（芸術資源館所蔵）

「牛と人」（1957年）（芸術資源館所蔵）

「窟」（1961年）（芸術資源館所蔵）

「断片・海・青」（1962年）（芸術資源館所蔵）

## 3) 断片シリーズ～残された、人間、扉、断片の人間存在、「声」へ

「先年イタリアに滞在していた折、私はロマネスク彫刻群に最も人間らしい感動を覚え、あまり人びとの行かないような片田舎をたずね歩いた。なかばうち捨てられたような丘地帯の静けさの中に、純な嬰兒の目の如き透明な、そしておどろきを語り変えてくる多くのロマネスク彫刻。（中略）全くそれぞれ自由な発想と、自由な場所に体をよせあうように地下から睨みあげる。誰が制作したのか解らない。だからそれだけに一層心にくらいついてはなそうとはしない重みが、ずっしりとのしかかってくる、確かな喜びに私は包み込まれていた。壁や柱頭、アーチ、床、台座は人間の広場を象徴して、今日失われつつある人間性に対して、一種の挑戦ではなかっただろうか。それぞれの自由な発想と、人間の自覚は、歴史の方向を開拓し、健康な広場を構築してゆく。ロマネスクのそうした人間像からの根強い声と、具体的な造形は、石の中に作られたというより、むしろ凝結したのだ。（中略）帰国後、直ちに『残された壁』の連作をはじめた。私は墓掘人夫のように、人間を断

片として見つめ、断片を拾い集める。断片であるからなおさら強烈に人間を創造させる。」（中本達也「作家の記録」『美術ジャーナル』復刊第1号、1972年11月、『人間賛歌』pp.11-15）

「高い塀のような真っ白い壁の墓がずっと続いて居ました。基盤に区切られたひとこまひとこまに個人の写真を陶板に焼き付けた肖像が嵌め込まれ、点々と原色の花束が飾られて、真夏の炎天下に白々と立つ壁に思わず息を呑んだのです。（中略）帰国して“残された壁”シリーズの作品が出来た時、私は直ぐあの墓場を思い浮かべてしまったのです。花束の原色と人間のフォルムが重なり、白い壁にずらりと並んだ人々が生の世界を見つめている様に見えて仕方がなかったのです。此の事をゆっくり話し合う事もなく突然逝ってしまっ」（臼井都「中本達也の墓に寄せて」『六月の風』13号1976年）

「残された壁（人間の扉）」（1967年）

油彩、キャンバス（芸術資源館所蔵）

「残された壁<人間断片“女”>」（1968年）リトグラフ（芸術資源館所蔵）

「人間の邑」（1968年）板、紙のカラーージュ、ディプティッチの右側（芸術資源館所蔵）

「無題」（1968年）リトグラフ、サインあり（芸術資源館所蔵）



#### 4) 中本達也（1922年～1973年）生誕100年記念事業構想

3カ年計画でできること

1) レクチャーシリーズの今後～資料収集、作品理解、50年代から70年代美術における中本達也の位置づけ、現代的意義

2) 展示準備～油彩、リト、紙、版画の額装経費、作品収集・収蔵経費、展示会場経費⇨クラウドファンディングのプランニング

3) 出版物、動画制作～目的？方法？資金？

#### <資料>

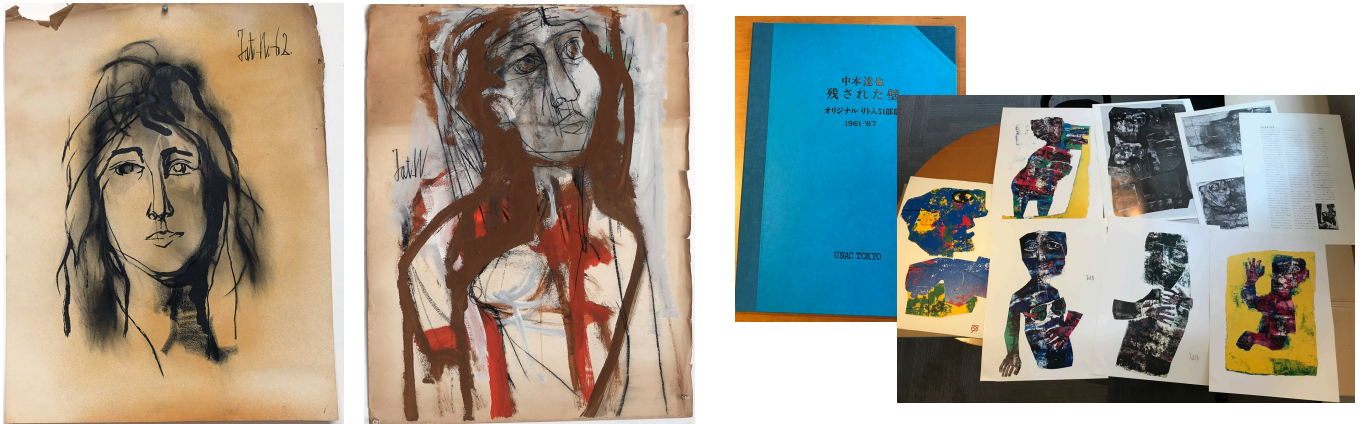
1. 中本達也作品リスト（1）
2. 中本達也「イタリアの今日」『三彩』1964年11月号
3. 中本達也「捨てられた断片から」『芸術新潮』1971年8月号
4. 臼井都「中本達也の墓に寄せて」『六月の風』13号1976年



中本達也とアトリエに残された作品②

私は墓掘人夫のように、人間を断片として見つめ、断片を拾い集める。断片であるからなおさら強烈に人間を創造させる。～中本達也『美術ジャーナル』1972年11月号

1) 1960年代の人物像概観



2) イタリア滞在中の風景画

～石の中の生活の歌を温かい肉体そのものとして掴み取っていく人間味を発見した「イタリアの今日」(『三彩』1964年)



3) 断片の再構成～リトグラフへの工程



<資料>

1. 中本達也作品リスト (1) 油彩
2. 中本達也作品リスト (2) 紙もの

## 中本達也銅版画の世界

### 1) 『中本達也銅版画全集』について

中本達也は1962年に「銅版画展」を大阪フォルム画廊で開催し、1959年から1962年の作品26点を出品している。没後に残された銅板は24枚（「蝶」「ながれ」は廃棄された）。それを1974年にUNACTO KYO（海上雅臣）が『中本達也銅版画全集1・2』として、100部限定で刷り、出版したものが、芸術資源館に数セットが残されていた。



サインは図像中に「T」の文字が見えるものが多く、刷りの外側にあるサインは、印刷（スタンプサイン）による。

版画の刷りは全て北園武によるもので、アルシュ紙（ナチュラルホワイト）に工房のエンボスが押されている。

\*最近でも2019年7月にギャラリー東京ユマニテにて、常設展示されている。

### 2) 手法（銅板の原板を見ないと確定的には言い難い）

エッチング（銅板上に防蝕のグランドを施し、ニードル等で描いた線画を腐食させる。クリアな線描が得られる。）

アクアチント（銅板上に松脂の粉末をかけ、熱し、微細な粒子の網掛けをつくる。それを腐食すると、黒い面がえられる）

ドライポイント（銅板にニードル等で直接描く。引っ掻いた部分の端がささくれており、描線の縁が滲んだように残る）

メゾチント（ベルソーカッターでグリッド状に細線を施し、バニッシャーでそのめくれをなめして絵柄をつくる。白から黒まで中間色を出せる）

\*海上雅臣によれば、「さかな」（1959年、第2集所収）では、エッチングで完成させ発表した後に、さらにドライポイントを施しているという。（『作品集』解説）

### 3) 作品の特徴

みづゑ賞、安井賞を受賞した1959年からイタリアに旅立つまでの時期であり、それまでの中本達也の絵画世界が見られる。肉塊が絡み合うような人物像や物語性よりは、「森」の奥深くに向けた眼差しや、洞窟壁画のような野生の記憶を感じさせる奥行き、そして「壁の人」のような壁画断片のように、マチエールとモチーフのテキスト、という安井賞受賞当時の中本達也の心象を思わせる。他に、「網」のような漁村風景、「小さな花」のような軽いタッチのもの、あるいは「西瓜」のようなメゾチントもある。



「群れ」1959年安井賞受賞作品

強い線（もしくはマチエール化した黒い面）によって、生物、自然の根源に近づこうとする～「黒土」「さかな」「潮」「鳥」「海鳥」「森」

野生時代へ遡行する洞窟壁画～「生き物」「野」

壁画に残され人物像～「少女」「壁の人」

草花や実への視線～「卵と実」「ザクロ」「西瓜」「小さな花」



<資料> 中本達也の断片・壁画への眼差し



赤く焼けただれた鉄砲団の跡が、無数に残っている分厚いその壁に、なまなましい色彩の仏たちの断片像を見つけ出したとき、私の存在があまりにも希薄で悲哀に満ちたものを感じられ、「この断片の壁画の人物像こそ本当に生きているのだ」、断片だからこそなお一層私の心に食い入って、私自身を批判し、生きる本来の姿を取り戻す一瞬を感じさせてくれたものであった。確かに北支那の空は広く、青く晴れ渡り、脈打つ地平にうじ虫のような兵士たちのやりきれない、なんともはかないうごめきだけがあった。あの壁画の断片像は健康に息づき、狂い疲れ果てた兵士たちとはまったく対照的ともとれたのだった。（中本達也『呪われた美』三省堂新書、1970年、6頁）

スペインのアルタミラの洞窟に入ったとき、私はその壁に描かれた野牛が烈しい生命のかたまりとして、群れをなして点在しているのを見た。赤錆びた色で表現された牛は、狩猟者たちの勝利の記録であっただろうか。この壁画が描かれたころは、おそらく人間も動物も劃然と区別して意識されていたわけではなく、動物は人間にいどみかかって人間を倒し、人間も必死になって動物に立ち向かったのだろう。そうした気迫が壁画からひしひしと感じとれた。石の突出している部分を牛の頭にしたり、大きな岩のかたまりをそのまま牛全体の姿に変身させる。その技法の素晴らしさは、ただ技術の優秀性以上に、古代人の魂の讃歌であった。私は、彼らの体の隅々から発する気迫と祈りを感じたのだった。現代の人間は小利口になりすぎていて、そうした形にはっきりとするされた肉体的な恐怖や歓喜を素通りしてしまう。だが、科学、技術の進歩で月の世界を征服した今日でも、なお古代の人間たちがのこした洞窟の壁画や石のかたまりである野牛の中に、人がまだ解明し得ていないなまなましい精神の謎の地帯が激しく鼓動しつづけているのである。（『呪われた美』155頁）



~~~~~  
<次回予告>

12月3日（土）午後6時～8時 中本達也のアトリエに残された作品④

「中本達也のアトリエ建築」として、建築士酒井哲氏をお招きします。酒井氏は『多摩のあゆみ』（2022年8月、187号）にて芸術資源館のアトリエ建築をご紹介いただいています。1950年頃に国立に転居し、アトリエを自ら設計、建築した中本のアトリエ構想をお話しいただく予定です。あわせて舞台美術を手掛けていた40年代の作品も紹介予定です。

**没年月日:**1973/07/22

**分野:**洋, 画家 (洋)

**読み:**

多摩美術大学教授で元自由美術協会会員であった洋画家の中本達也は、7月22日午後1時49分、脳腫瘍のため東京・府中市の都立府中病院で死去した。享年51歳。中本達也は、大正11年(1922)2月13日、山口県大島郡に生まれ、昭和18(1943)帝国美術学校(現、武蔵野美術大学)西洋画科を卒業、学徒動員で軍隊に入り、昭和20年復員した。はじめ、舞台美術、新劇運動に従事したが、自由美術家協会展に出品、昭和26年同会15回展「人と人」「間(ま)」、同27年16回展「回想」などを出品、27年に自由美術家協会会員にあげられた。昭和34年(1959)みづゑ賞選抜作家展でみづゑ賞を受賞し、中南米巡回展に出品、同年、「群れ」で第3回安井賞を受けた。昭和35年ギャラリー・キムラで第1回個展、翌年東京大丸ギャラリーで第2回個展、昭和37年大阪関西画廊で個展、同年大阪フオルム画廊でエッチングによる個展を開催した。昭和38年(1963)自由美術協会を退会したが、それまでに昭和28年「土壌」「思策」「誕生」、同30年「水浴」、同31年「牛飼い」「洪水」、同32年「憩える海人」、同33年「とり」「供物」、同34年「窟の声」、同35年「火山帯(動物)」、同36年「狩」、同37年「東洋の声」を同展に発表した。昭和38年から翌年(1963-64)までイタリアに滞在、昭和42年壱番館画廊で個展「残された壁」、翌年同画廊で個展「人間断片」を開催した。昭和45年、多摩美術大学油画科教授に就任、同47年、千葉県の鋸山に広大な岩壁彫刻「岩の声」を制作した。内面的な思考と叫びを彫直な形体で造型化した作風はその特異性を評価されて、昭和48年(1973)、東京セントラル美術館で『岩の声まで』と題して回顧展が開催された。

**出典:**『日本美術年鑑』昭和49・50年版(243-244頁)

**登録日:**2014年04月14日

**更新日:**2021年12月10日 ([更新履歴](#))

引用の際は、クレジットを明記ください。

例)「中本達也」『日本美術年鑑』昭和49・50年版(243-244頁)

例)「中本達也 日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所) <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9388.html> (閲覧日2022-08-09)